悠・遊・友、そして意宇
“志人道”を生きる

ゆう科学通信

Vol.14
Oct. 10月
2015年10月30日発行

発行：八雲志人館
〒690-2102
島根県松江市八雲町東岩坂3442-9
電話・FAX 0852-54-1023
E-mail／shijinkan@bell.ocn.ne.jp

一村一志

「夢の芽生える文化」創造のプラットホーム「八雲志人館」は、将来に向けて持続可能な地域を創出することをめざして活動します。

「悠久の河」意宇川紀行③

「意宇六社めぐり」真名井神社と山代郷正倉跡

『出雲国風土記』には、「神が隠れこもる山」として、4つのカンナビ山が記載されています。仏経山（出雲市斐川町）、大船山（出雲市多久町）、朝日山（松江市東長江町）、そして意宇平野にそびえる茶臼山（松江市山代町）です。

茶臼山は、人類誕生（200万年前）をはるかにさかのぼる1000万年前に活動したアルカリ玄武岩つまり溶岩で構成されているとされています。標高171mの穏やかな山容からはうかがい知れない、大地生成の激しいエネルギーがこもっているのです。その南東の麓に、溶岩に染み入った水が、地下水となって湧き出た「真名井の滝」があります。

真名井の滝

真名井とは、神聖なすばらしい泉のこと。宮崎県高千穂峡に同名の滝があり、また鳥取県大山、三重県伊勢、京都府天橋立など、各地に真名井と呼ばれる清泉があります。

茶臼山の真名井の滝は高さ約3mと小さなものですが、はるか古代より涸れることのない滝と伝えられ、意宇平野の水田を潤す恵みの水として活かされてきました。また、出雲大社の宮司（出雲国造）の代替わりの際に行われる「火継（ひつぎ）式」や、毎年の「古伝新嘗（しんじょう）祭」には、この滝の水が聖水として必ず用いられてきました。出雲国造家と意宇との強いつながりを示す一例です。

◇真名井神社

真名井の滝から西に300mほど離れた、茶臼山の南斜面に「意宇六社」のひとつである真名井神社があります。『風土記』に「眞名井社」として記載されている古社です。元は真名井の滝の傍に祀（まつ）られていたといわれています。

真名井神社の狛犬

県道247号（八重垣神社竹矢線）脇に立つ鳥居の前には、阿吽（あうん）一対の堂々たる狛犬が身構えています。角石が高々と積まれた台座の上から、参拝者を見下ろす恰好です。いかにも「魔」を威嚇しているような、今にも飛びかからんばかりの姿は「出雲構え型」といわれるものだそうです。

大社造りの本殿

鳥居をくぐり、時を経た90段の急な石段を登り切ると、ぱっと清浄な空間が開けます。大社造り、檜皮葺（ひわだぶき）の本殿は清楚の言葉がよく似合う風情です。大火にあった後、1662年（寛文2年）に再建されたものだそうです。拝殿は質朴な土間床の造りで、むき出しの土が、古代から蓄えられてきた力のようなものを感じさせます。

主祭神は、日本の国生みの祖とされるイザナギノミコトです。このため、通称は「伊弉諾（いざなぎ）さん」。意宇川をはさんで当社の南西に鎮座する神魂（かもす）神社（松江市大庭町）はイザナミノミコトが祭神です。両社を一対と見立て、中世の室町時代（14～16世紀）には「両神魂」とも呼ばれていたといいます。

社紋も神魂神社と同じ、「二重亀甲に『有』文字」です。神有月（かみありづき）の「十月」の二字を組み合わせると「有」になるのだと由緒記にあります。ちなみに、出雲大社の古い時代の紋も同じだったそうです。

◇神仏の通ひ路

山陰では、よく「神仏の通ひ路」という看板を見かけます。これは、島根・鳥取両県の10市町で見られるもので、大山を含み、中海・宍道湖を8の字で囲むように設定された、寺社や史跡、景勝地を巡るコースを示すものです。

「神仏の通ひ路」看板

国分尼寺跡、国分寺跡、真名井神社とたどる、茶臼山南麓の県道247号線沿いにも立っています。真名井神社から県道を300mほど西に行くと、南新造院跡という史跡があります。四王寺（しわじ）跡とも呼ばれるお寺の跡です。茶臼山をはさんで北側には、国指定史跡になっている北新造院跡＝来見（くるみ）廃寺跡もあり、「神仏の通ひ路」というネーミングに納得する一帯になっています。

このふたつの新造院は、733年に編まれた『出雲国風土記』に、意宇郡山代郷にあると記されています。したがって、750年代に創建されたとされている出雲国分寺よりもずっと古い寺院だったことがわかります。

「意宇六社めぐり」のコース沿いにある南新造院跡は、後に出雲国造となる出雲臣弟山（おとやま）という豪族が創建したものと伝えられています。古代の地方寺院で建立者名がわかり、寺院跡が今日まで残されている例は稀です。

南新造院跡

四王寺という名は、新羅との緊張関係を背景に、出雲・石見・隠岐など古代山陰5か国に朝廷から配られた、仏法の守護神である四天王像を祀っていたためといわれています。

金堂跡とされる石積み基壇や土器、瓦などが出土しています。軒丸瓦は高句麗系、軒平瓦は新羅系といわれ、古代における、この地域と朝鮮半島との盛んな交流を物語るものと言えるでしょう。

◇山代郷正倉跡

南新造院跡から、さらに西に500mほど行くと、県道247号線と国道432号線が交わる大庭十字路に面して山代郷正倉（しょうそう）跡があります。

山代郷正倉跡

『風土記』に「山代郷は郡家の西北三里一百二十歩（約1・8㎞）のところにあり…正倉あり」と記されています。「正倉」とは、税として納められた米などの穀物を収めておく倉のことです。付近は長者原という地名で、「昔、長者（富豪）が米蔵の米を燃やして火葬させた」との伝承もあり、土中に炭化した米があることが知られていたそうです。

1978年（昭和53年）より発掘調査が行われた結果、直径60㎝もの柱を20本も使用した、4間（7・48m）×3間（6・69m）の建物3棟と、柵や溝、建物が火災にあったためと推定される多量の炭化米が発見され、山代郷正倉跡と確認されました。『風土記』の記述の正確さが証明されたのです。

跡地は、住宅に囲まれてはいるものの、広々とした空間がぽっかりと開けています。一角はゲートボール場になっており、四阿（あずまや）、トイレも配されています。古代と現代が融合した雰囲気の広場で、お弁当など楽しまれてはいかがでしょうか。

「六社めぐり」の3回目（次回は神魂神社の予定）を、古代史ファンには興味深い、意宇平野にまつわる話題で締めくくることにしましょう。

山代郷正倉の想像復元画（案内板より）

山代は邪馬台では？

『風土記』に「山代郷には山代日子命（ヤマシロヒコノミコト）が鎮座しておられる」とあることから、この山代をヤマタイと読み、こここそ邪馬台国の首都であり、日子とは日の御子（ひのみこ）、すなわち卑弥呼（ひみこ）のことではないか、という説です。この説には、卑弥呼が魏の皇帝からもらったとされる「景初三年」の銘が刻まれた青銅鏡が、出雲から出土しているという応援材料もありますが、もちろん立証されてはいません。

最後にもうひとつ。大国主は意宇（おう）国主では？

（交易場修）

◇後記

「ゆう科学通信」は皆様からのご意見、情報を礎に発信していきます。

ご投稿はメール、ファクスでお願いいたします。